

開始を表すアバール語の動詞 bajbiç-ize*

山 田 久 就

1. はじめに

本稿の目的は開始を表すアバール語の動詞 bajbiç-ize の統語的な特徴を明らかにすることである¹。アバール語はダゲスタン諸語（北東コーカサス諸語とも呼ばれる）に属し、主にロシア連邦ダゲスタン共和国で話されている。本研究の資料は標準アバール語で書かれた出版物からのテキストであり、42冊の本、6種類の新聞、1種類の雑誌を利用した。これらのテキストの中で bajbiç-ize がどのように使われているのかを明らかにしていく。

bajbiç-ize に関する先行研究は、Bokarev (1949: 147), Mallaeva (2000 :

* 標準アバール語の文語で用いられている文字はキリル文字であるが、ラテン文字へ次のような転写を行って、標準アバール語を表記している。a=a, б=b, в=w, г=g, гь=g, гъ=h, rI=ç, д=d, e=e, ж=ž, з=z, и=i, й=j, к=k, къ=q', кь=l', kI=k', л=l, лъ=l, м=m, н=n, о=o, п=p, р=r, с=s, т=t, rI=t', y=u, ф=f, x=x, хь=q, хъ=ç, xI=h, ц=c, цI=c', ч=ç, çI=ç', ш=š, ш=šš, э=è, ю=ju, я=ja, ъ='。アバール語で使われているキリル文字のラテン文字への転写には標準的な方法が確立しておらず、ここでの転写法は筆者独自のものであることをお断りしておく。本稿で用いる省略記号は次の通りである。ABS: absolutive (絶対格); AM: agreement marker (一致標識); APRT: Adjectival participle (形容詞的分詞); DAT: dative (与格); ERG: ergative (能格); F: female (女性); FUT: future (未来); GEN: genitive (属格); INF: infinitive (不定詞); LAT1: 1-st lative (第一向格); LOC1: 1-st locative (第一位格); M: male (男性); NEG: negative (否定); NH: non-human (非人間); PCNV: perfect converb (完了連用形); PL: plural (複数); PRS: present (現在); PST: past (過去); QES: question marker (疑問標識); QUOT: quotation marker (引用標識); SCONV: simultaneous converb (同時連用形)。本稿は文部科学省科学研究費補助金（基盤研究(C)，研究課題：『アバール語における動詞＋動詞型の複合動詞に関する総合的研究』，課題番号：23520484，研究代表者：山田久就，研究期間：2011～2013年度）から助成を受けている研究の成果の一部である。

¹ 動詞を提示する場合は不定詞形を使う。

160-161), Bashirova (2008: 39-43), Gebekova (2009: 91), Magomedova (2010: 125-126), Devletmurzaeva (2011: 55), Muxtarova (2012: 150-152) で bajbiç-ize が不定詞形の動詞と結びつくことが述べられているぐらいであり, その他で bajbiç-ize を扱っている文献は辞書しかない。アバール語ロシア語辞典である Saidov (1967) には当然ながら bajbiç-ize を見出し語とする箇所があるし, ロシア語アバール語辞典である Alixanov 他 (2003) には開始を意味するロシア語の見出し語の箇所でその見出し語の訳として bajbiç-ize が挙げられている。

本稿の構成は, 第2節で bajbiç-ize が名詞とだけ結びつく場合, すなわち, 「～が始まる」, 「～が～を始める」などを表す場合について述べ, 第3節で bajbiç-ize が動詞と結びついている場合, すなわち, 「～が～し始める」を表す場合について問題にする。第4節では, bajbiç-ize のその他の使われ方について1例を挙げる。

本題に入る前に, 以下で必要と思われるアバール語に関する情報について述べておく。アバール語の名詞, 代名詞は絶対格・能格型の格パターンを示す。自動詞の例を(1)に, 他動詞の例を(2)に示す。

- (1) Emen w-eł-ana.

父. ABS M-笑う-PST

「父が笑った」[GG-G, p. 127]

- (2) ha-l was kutakalda w-ecc-ana

この人. F.ERG 息子. ABS 強く M-ほめる-PST

「この女の人が息子を強くほめた」[ASS, 2008, No. 14, p. 8]

(1)では主文動詞として自動詞 AM-eł-ize 「笑う」が使われていて, 自動詞の唯一の項が絶対格で現れている。以下, 自動詞の絶対格の項を S と呼ぶことにする。一方, (2)では, 他動詞 AM-ecc-ize 「ほめる」が主文動詞として使われていて, 他動詞の二つの項が能格と絶対格で現れている。他動詞の能格で

現れている項を A と呼び、絶対格で現れている項を O と呼ぶことにする。

アバール語には、自動詞と他動詞の中間的な位置にある一群の動詞がある。こうした動詞では、経験者が第一位格や与格で現れる² (Bokarev, 1949 : 34-38, Alekseev and Ataev, 1997 : 100, Mallaeva, 2002 : 146-151)。この種の動詞は全て二項動詞であり、もう一つの項が名詞であれば、その名詞は絶対格で現れる。この絶対格で現れる項を便宜的に被経験者と呼ぶことにする。また、第一位格の経験者を取る動詞を位格動詞、与格の経験者を取る動詞を与格動詞と呼ぶことにする。(3), (4)がこのタイプの動詞の例である。

- (3) Dida mun ła-ła-ro.
私. LOC1 あなた. ABS 知っている-PRS-NEG
「私はあなたを知らない」 [MM-G, p. 250]
- (4) Die mun j-oł'-ula
私. DAT あなた. ABS F-好く-PRS
「私はあなたが好きだ」 [MP-K, p. 103]

(3)では、動詞 ła-ze 「知っている」の経験者が第一位格で現れていて、被経験者は絶対格で現れている。(4)では、動詞 AM-oł'-ize 「好く」が使われているが、経験者が与格で現れていて、もう一つの項は絶対格で現れている。

2. 名詞とだけ結びつく場合

bajbiç-ize は、「～が始まる」という意味の自動詞としても、「～が～を始め」という意味の他動詞としても使われる (Saidov, 1967 : 47)。(5)が bajbiç-ize が自動詞として使われている例であり、(6)が他動詞として使われている例で

² アバール語には位格、向格、奪格、経路格がそれぞれ五つある。第一位格は「～の表面に」を意味する。位格、向格、奪格、経路格について詳しくは、Madieva (1980 : 52-56) を参照。

ある。

- (5) Bajbiç-ana janwar.
 始まる-PST 1 月. ABS
 「1 月が始まった」[GM-S, p.21]
- (6) Nemc-az hužum bajbiç-ana.
 ドイツ人-PL.ERG 攻撃. ABS 始める-PST
 「ドイツ人達が攻撃を始めた」[ShM-C, p.99]

アバール語では、一つの動詞が、変化あるいは移動を表す自動詞としても、それに行為者を加えた意味を表す他動詞としても使われることが多い。たとえば、AM-ek-ize は、「割れる」という意味の自動詞として、また、「割る」という意味の他動詞としても使われる。アバール語では、変化あるいは移動を表す自動詞がそれに行為者を加えた意味を表す他動詞から作られることはない。変化あるいは移動を表す自動詞が他動詞としては使われない場合、使役形で行為者を加えた意味を表す他動詞を作る。たとえば、baqwa-ze は「乾く」という意味で自動詞として使われるが、「乾かす」という意味の他動詞としては使われない。「乾かす」は、baqwa-ze の使役形 baqwa-z-a-AM-ize で表される。上で述べたように、「割る」を表すのに AM-ek-ize を他動詞として用いることもできるが、AM-ek-ize の使役形 AM-ek-iz-a-AM-ize を使っても「割る」という意味を表すことができる。自動詞としても他動詞としても使われる変化あるいは移動を表す動詞はほとんどの動詞でその動詞の使役形を用いてその動詞の他動詞としての用法とほぼ同じ意味を表すことができる (Bokarev, 1949: 65-67, 山田, 2010: 91)。一般的に言って、こうした使役形の使用は少なくない。しかし、この点において、bajbiç-ize は例外的である。私が調べたテキストで bajbiç-ize の使役形が使われているのは、(7)で示す 1 例しかない。この例では「始める」という意味で bajbiç-ize の使役形が使われている。

- (7) ugolownija-b delo-jin ab-uni ħic'go anl'go son-aldasan – 2004 sonalda –
guronı bajbiç-iz-a-b-ize k'w-eč'o zakon c'un-ule-l idar-abazda!
「刑事裁判はというと 8 年後（2004 年）にしか法律を守る組織は始めるこ
とができなかった」[MIL, 2011, No. 7, p. 4]

ここで、終了を意味する動詞ではどうであろうかということに興味がわく。
ħuŋ-ize という動詞が「終わる」という意味の自動詞としても、「終える」とい
う意味の他動詞としても使われる。この動詞の使役形 ħuŋ-iz-a-AM-ize は、
bajbiç-ize の場合と違って、「終える」という意味でよく使われている。

bajbiç-ize は、「～が始まる」、「～が～を始める」という意味の他に、「～が
～に取りかかる、着手する」という意味でも用いられる (Saidov, 1967 : 47)。
(8), (9) がその例である。

- (8) nižeca bajbiç-ana cadaqa-b ħalt'-uda.
私達. ERG 取りかかる-PST 共通の-NH 仕事-LOC 1
「私達は共通の仕事に取りかかった」[MIL, 2011, No. 1, p. 11]
- (9) Ĥamid-ica ħalt'-ude bajbiç-ana.
Xamid-ERG 仕事-LAT 1 取りかかる-PST
「Xamid が仕事に取りかかった」[RG 2-A, p. 49]

着手する対象は(8)のように第一位格で現れることもあれば、(9)のように第
一向格で現れることもある³。第一位格と第一向格で揺れがあることは他の動
詞でも見られる (山田, 2010 : 87-88)。アバール語ロシア語辞典である Saidov
(1967 : 47) には、bajbiç-ize の項目に、着手する対象が第一位格で現れてい
る例 (ħalt'ida 「仕事に」) がある。また、ロシア語アバール語辞典である

³ 第一向格は「～の表面」への移動を表す。

Alixanov 他 (2003: 474) では、「～が～に取りかかる, 着手する」を意味するロシア語の単語 pristupit' の項目に着手する対象が第一向格で現れている例 (išalde 「用事に」) がある。しかし, どちらの例にも行為者は現れていないが, 行為者は, (8), (9) のように能格で現れる。bajbiç-ize のこの用法では絶対格名詞は現れることがない。能格名詞は現れるが, 絶対格名詞は現れることがないというのは, 他の動詞でもあるが, その数は極めて少数である (山田, 2010: 91)。

3. 動詞と結びつく場合

bajbiç-ize は, 不定詞形の動詞と結びついて, 「～が～し始める」という意味で使われる。この第3節では, テキストで bajbiç-ize が不定詞形の動詞といっしょにどのように使われているのかを考察していく。

3.1 「～が～し始める」を表す三つの動詞

アバール語で「～が～し始める」を表す動詞には bajbiç-ize, łuh-ine, žu-AM-a-ze の三つの動詞がある (Bokarev, 1949: 147, Mallaeva, 2000: 160-161, Bashirova, 2008: 39-43, Gebekova, 2009: 91, Magomedova, 2010: 125-126, Devletmurzaeva, 2011: 54)。(10), (11), (12) はそれぞれ bajbiç-ize, łuh-ine, žu-AM-a-ze の例であり, どれも AM-a-ze 「降る」が不定詞形でそれぞれの動詞に埋め込まれている。

- (10) c'ad b-a-ze bajbiç-ana.
 雨. ABS NH-降る-INF 始める-PST
 「雨が降り始めた」[MP-K, p. 90]
- (11) c'ad b-a-ze łuh-ana.
 雨. ABS NH-降る-INF 始める-PST
 「雨が降り始めた」[MP-K, p. 201]

- (12) c'ad b-a-ze žu-b-a-na,
 雨. ABS NH-降る-INF 始める. NH-PST
 「雨が降り始めた」[SM3-A, p. 15]

huh-ine はもともと自動詞として使われるが、意味は多義的で、(1)「起こる」、(2)「～になる」、(3)「移動する」などの意味で用いられる。žu-AM-a-ze はもともと「混ざる」、「混じる」などの意味で自動詞としても他動詞としても用いられる。

ここで気になるのは、テキストで不定詞従属節を従えた環境でこの三つの動詞がどの程度の割合で使われているのかということである。そこで、bajbiç-ize に関して調査したテキストの中から 25 冊（16 著者）の本を使って、不定詞動詞といっしょに使われている三つの動詞の数を数えてみた⁴。著者別の結果を表 1 に示す。

⁴ 次の 25 冊の本を利用した。Batirowa, Zalmu, T'erçunareb c'wa. Maxachkala, Epoxa, 2006.; Daganow, Şabdula, Şadamal — dir c'wabi. Maxachkala, 1997.; Dadaew, Jusup, Ahul goh — dir rek'el buhi. Maxachkala: Jupiter, 1998.; Ğalbac'ow, Ğazimuĥamad, Ganč'al. Maxachkala: Dagestanskoe knizhnoe izdatel'stvo, 1994.; Şaliew, Muslim, Sardil l'wahi. Maxachkala, Jupiter, 1993.; Murtazaliewa, Pat'imat, Surat. Maxachkala: Daguchpedgiz, 1990.; Murtazaliewa, Pat'imat, Kulakasul jas. Maxachkala: Dagestanskoe knizhnoe izdatel'stvo, 1995.; Muĥamadow, Musa, Biharodul gut'bi. Maxachkala: Daguchpedgiz, 1985.; Muĥamadow, Musa, Goro-c'er balelde cebe. Maxachkala: Dagestanskoe knizhnoe izdatel'stvo, 1991.; Rasulow, Şarip, Şadamalgi raşadalgi. Maxachkala: Dagestanskoe knizhnoe izdatel'stvo, 1996.; Rasulow, Şarip, Uzdenal. Maxachkala: Lotos, 2006.; Rasulow, Q'urbanşali, Bac'adisel. Maxachkala, 1997.; Sulimanow, Muĥamad, Labgo q'isa. Maxachkala: Dagestanskoe knizhnoe izdatel'stvo, 1958.; Sult'anow, Badrudin, Izano rosu. Maxachkala, 2007.; Sult'anow, Badrudin, Q'ismat. Maxachkala, 2007.; Surxaew, Musalaw, Nux bit'agi. Maxachkala: Daguchpedgiz, 1990.; Surxaew, Musalaw, Tusnaqazda GULAGalda. Maxachkala: Jupiter, 1994.; Surxaew, Musalaw, Awaragasul xalşat. Maxachkala: Jupiter.; Şaxtamanow, Şumar-Haži, Q'aral űor. Maxachkala: Dagestanskoe knizhnoe izdatel'stvo, 1994.; Şamxalow, Muĥamad, C'udul was. Maxachkala: Daguchpedgiz, 1982.; Şamxalow, Muĥamad, Q'isabi wa xarbal. Maxachkala, 2002.; Hażiew, Husen, Ro'lul t'eh. Maxachkala, Daguchpedgiz, 1992.; Hażiew, Husen, Imam Ĥamzat. Maxachkala, 1995.; Ĥamzaew, Muĥammad, Muĥammad awarag. Moscow, 2005.; Ĥamzaew, Muĥamad, Xirijal xalifabi. Moscow, Tarix, 2007.

表 1

	bajbiç-ize	łuh-ine	žu-AM-a-ze	合計
Batirowa, Zalmu	17(29%)	41(69%)	1(2%)	59
Daganow, Ğabđula	51(23%)	169(76%)	3(1%)	223
Dadaew, Jusup	79(63%)	38(30%)	9(7%)	126
Ğalbac'ow, Ğazimuĥamad	9(11%)	71(89%)	0(0%)	80
ġaliew, Muslim	17(39%)	26(59%)	1(2%)	44
Murtazaliewa, Pat'imat	23(23%)	74(76%)	1(1%)	98
Muĥamadow, Musa	26(14%)	157(83%)	7(4%)	190
Rasulow, ġarip	104(18%)	444(76%)	40(7%)	588
Rasulow, Q'urbanġali	9(56%)	7(44%)	0(0%)	16
Sulimanow, Muĥamad	18(8%)	195(89%)	5(2%)	218
Sult'anow, Badrudin	24(38%)	30(48%)	9(14%)	63
Surxaew, Musalaw	26(11%)	30(13%)	174(76%)	230
Šaxtamanow, ġumar-Ĥaži	5(24%)	13(62%)	3(14%)	21
Šamxalow, Muĥamad	22(17%)	92(71%)	15(12%)	129
Ĥažiew, Ĥusen	64(33%)	126(65%)	4(2%)	194
Ĥamzaew, Muĥamad	59(36%)	93(57%)	11(7%)	163
合計	553(23%)	1,606(66%)	283(12%)	2,442

合計では、bajbiç-ize, łuh-ine, žu-AM-a-ze の順で、553 (23%), 1,606 (66%), 283 (12%) である。łuh-ine がよく使われるが bajbiç-ize も普通に使われていて、žu-AM-a-ze の使用が少ない。著者別に見てみると、16 人中 14 人、合計と同じように、łuh-ine, bajbiç-ize, žu-AM-a-ze の順番で使用頻度が少なくなっている。残りの二人は Jusup Dadaew と Musalaw Surxaew であるが、Jusup Dadaew の使用頻度の順番は bajbiç-ize (63%), łuh-ine (30%), žu-AM-a-ze (7%) となり、この著者は bajbiç-ize の使用をとても好むことがわかる。一方、Musalaw Surxaew の使用頻度の順番は žu-AM-a-ze (76%), łuh-ine (13%), bajbiç-ize (11%) となり、例外的に、žu-AM-a-ze の使用を圧倒的に好んでいる。Musalaw Surxaew の žu-AM-a-ze の使用は全著者の žu-AM-a-ze の使用数の半分以上を占めていて、Musalaw Surxaew を除いた 15 人の bajbiç-ize, łuh-ine, žu-AM-a-ze の使用頻度は 527 (24%), 1,576 (71%), 109

(5%)となり、zu-AM-a-ze は一般的にはあまり使われないことがわかる。Musalaw Surxaew および Jusup Dadaew の例外的な状況が単に個人的なものなのか、それとも、地域方言での違いが標準語に与えている影響なのかは興味深い問題であるが、今は答えられないので保留しておく。

次に、埋め込まれている不定詞形の動詞の意味的あるいは形態統語的なタイプによって「～をし始める」を表す三つの動詞のどれかといっしょに使われる傾向が強いということがあるのかどうかというのは、重要な問題である。しかし、それぞれの動詞と使われている不定詞動詞を見比べてもはっきりとした傾向は見られなかった。そうした傾向があったとしてもかなり緩やかな傾向であると考えられる。

3.2 使役形の使用

luſ-ize が「～が終わる」という自動詞としても「～が～を終える」という他動詞としても使われることは上で述べた。luſ-ize は「～が～し終える」という意味を表すのにも使われ、埋め込まれる動詞は、bajbiç-ize と違って完了連用形である。luſ-ize の使役形を使って、「～が～を終える」という意味を表すことがあることも上で述べた。この使役形は「～が～し終える」という意味を表す場合にも使われる。それに対して、「～が～し始める」を表すのに bajbiç-ize の使役形が使われている例は私が調べたテキストには1例も見られない。

3.3 格

ここでは、動詞が bajbiç-ize に埋め込まれた場合、その動詞の項である名詞の格はどのようになるのかについて問題にする。まず、他動詞から始める。(13)がその例である。

- | | | | | |
|------|---------------------------|---------|------------|------------|
| (13) | he-z | ſumru | ha-b-ize | bajbiç-ana |
| | その人. PL.ERG | 生活. ABS | する. NH-INF | 始める-PST |
| | 「彼らは生活し始めた」[DJu-A, p.296] | | | |

(13)では、埋め込まれた他動詞の A が能格で、O が絶対格で現れている。私が調べたテキストには他動詞が *bajbiç-ize* に埋め込まれている例が 1,321 例ある。その中には、A や O が明示的に現れていない例もあるが、A が能格以外で現れている例や O が絶対格以外で現れている例はない。したがって、*bajbiç-ize* が他動詞を埋め込んでいる場合、A は能格で現れ、O は絶対格で現れると見なしていいと考える。

次に、第 1 節で述べた位格動詞、与格動詞はどうであろうか。(14)は位格動詞 *AM-iç-ize* 「見える」が *bajbiç-ize* に埋め込まれている例であり、(15)は与格動詞 *AM-oġ'ize* 「好く」が *bajbiç-ize* に埋め込まれている例である。

- (14) Mansur-ida-gi Surxaj-ida-gi jaq'ingo b-iç-ize
 Mansur-LOC 1-も Surxaj-LOC 1-も はっきりと NH-見える-INF
bajbiç-ana [...] *insan-asul sipat.*
 始める-PST 人-GEN すがた. ABS
 「Mansur にも Surxaj にも人の姿がはっきりと見え始めた」[RG2-A, p.92]
- (15) Limer-aġe raç gure-b žo b-oġ'-ize
 こども-DAT 乳. ABS 以外の-NH もの. ABS NH-好く-INF
bajbiç-ara-b mex-aġ,
 始める-APRT.PST-NH 時. ERG
 「子供が乳以外のものを好きになり始めた時」[ASS, 2007, No.16, p.4]

テキストには、位格動詞が *bajbiç-ize* に埋め込まれている例は、17 例ある。具体的には、*AM-iç-ize* 「見える」(2 例)、*AM-iç'e-ize* 「わかる」(7 例)、*k'oç-ene* 「忘れる」(4 例)、*raç-ize* 「聞こえる」(3 例)、*jaq'inġ-ize* 「明らかになる」(1 例)である。17 例のうちの 4 例で経験者が、また、2 例で被経験者が明示的に現れていないが、明示的に現れている例では、経験者は第一位格であり、被経験者は絶対格である。また、与格動詞が *bajbiç-ize* に埋め込まれている例は、2 例ある。*AM-oġ'ize* 「好く」(1 例)、*t'atine* 「明らかになる」(1 例)であ

る。この2例では、経験者は与格で現れて、被経験者は絶対格で現れている。したがって、他動詞の場合と同様に、動詞が定形で使われている場合と bajbiç-ize に埋め込まれている場合で、動詞の項が違う格を取っている例は存在しない。

次は、自動詞が bajbiç-ize に埋め込まれている場合について述べる。上に挙げた(10)では、自動詞 AM-a-ze「降る」の S が絶対格で現れていて、AM-a-ze「降る」が定形である場合と同じ状況である。しかし、S が絶対格で現れるのは、自動詞が bajbiç-ize に埋め込まれている全ての例で起こっているわけではない。(16)は自動詞 lut-ize「逃げる」が bajbiç-ize に埋め込まれている例であるが、興味深い。

- (16) k'igo was-as lut-ize bajbiç-ana.
 2 少年-ERG 逃げる-INF 始める-PST
 「2人の少年が逃げ始めた」[SM3-A, p.122]

(16)では、埋め込まれている自動詞 lut-ize「逃げる」の S が絶対格ではなく能格で現れている。テキストには bajbiç-ize に埋め込まれている自動詞が全部で 571 例ある。その中の 125 例では S が明示的に現れてなく、S が明示的に現れているのは 446 例である。その 446 例の内、S が絶対格で現れているのは 330 例であり、能格で現れているのは 116 例である。S が絶対格で現れている例と能格で現れている例を比較すると、能格で現れている 116 例の S は全て人間か動詞の生物である。一方、S が絶対格で現れている 330 例の内その S が生物であるのは 97 例である。したがって、233 例で無生物の S が絶対格で現れている。この数字をもって無生物の S は必ず絶対格で現れると断定することはできないが、無生物の S は絶対格で現れる強い傾向があるとは言える。一方、生物の S では、能格が 116 例 (54%) で、絶対格が 97 例 (46%) ではほぼ互角である。次に、S が生物である場合、どういう動詞で S が能格であるいは絶対格で現れるのかについて考える。S が能格と絶対格の両方で現れている自

動詞は 15 動詞である。それに対して、S が絶対格で現れている例でしか使われていない自動詞は 21 動詞であり、S が能格で現れている例でしか使われていない自動詞は 31 動詞である。S が絶対格で現れている例で使われている動詞と S が能格で現れている例で使われている動詞を見比べると、意図性がないあるいは意図性がほぼ問題にならない動詞では S は絶対格で現れていることがわかる。次の動詞では S が絶対格だけで現れている。AM-aq'-ize 「腹が減る」(2 例), hit'inł-ize 「小さくなる」(1 例), zaʕipł-ize 「弱る」(1 例), k'odoł-ize 「大きくなる」(1 例), saxł-ize 「健康になる」(1 例), t'aʕ-ine 「いなくなる」(1 例), xw-eze 「死ぬ」(1 例), qaħill-ize 「青くなる」(1 例), c'ik'k'-ine 「増える」(2 例)。S が能格で現れている例で使われている動詞はほぼ意図的な動きを表す動詞であるが、全てではない。S が能格で現れている例で使われている動詞には ʕod-ize 「泣く」(3 例), swad-ize 「うとうとする」(1 例)が含まれている。この二つの動詞は意図的に泣いているふり、うとうとしているふりをしている場合でも使えるが実際のテキストの文脈から判断すると非意図的な動作で使われている。しかしながら、絶対ではないが非意図的な動詞を表す動詞では S は絶対格で現れる傾向がかなり強いと考えることができる。これは、そもそも意図性を表すことができない無生物が S である全ての例で S が絶対格で現れていることと明らかに関係していると思われる。

S が能格と絶対格の両方で現れているのは上に述べたように 15 動詞であるが、次の表にそれぞれの動詞での割合と合計を示す。

表 2

	絶対格	能 格
AM-ag-ize 「争う」	2	3
AM-akk-ize 「現れる」	1	2
AM-asand-ize 「遊ぶ」	1	1
AM-ač'-ine 「来る」	16	1
aħd-eze 「叫ぶ」	2	2
goč-ine 「移住する」	3	4
ine 「行く」	6	3
q'a-ze 「移動する」	4	4
l'wahd-eze 「銃撃する」	2	7
k'aġa-ze 「話す」	6	2
ħuh-ize 「移動する」	1	4
l'ut-ize 「逃げる」	7	4
t'ur-ize 「逃げる」	7	2
çwad-ize 「移動する」	5	13
ħalt'-ize 「働く」	4	15
合計	67	67

合計はともに 67 例で同じである。個別に見ていっても、AM-ač'-ine 「来る」で絶対格 16 例に対して能格 1 例と極端な割合を示しているが、全体としてはなんらかの傾向を示しているようには思えない。

3.4 語順など

bajbiç-ize と従属している不定詞動詞の結びつきの強さについて考える。二つの動詞が結びついていて、その結びつきが強い場合、その二つの動詞は常に隣接していて、従属的な動詞には助詞などが付くことができない。最初に語順であるが、不定詞動詞は bajbiç-ize の直前にあることが多いが、(17)や(18)のように、前や後ろに離れていることも結構ある。

- (17) T'eha-ze he-b bajbiç-ula
 咲く-INF それ-NH.ABS 始める-PRS
 「それが咲き始める」 [SUG, 2011, No.4, p.27]

- (18) bajbiç-ana c'ad b-a-ze.
 始める-PST 雨. ABS NH-降る-INF
 「雨が降り始めた」 [SM2-T, p.49]

また、不定詞動詞が bajbiç-ize の直前にある場合でも、不定詞動詞の後ろに助詞の -gi 「～も」 や -cin 「～さえ」 などが付いている例もある。(19)は、-gi 「～も」 が付いている例である。

- (19) cocoja-l naqe q'a-ze-gi bajbiç-ana.
 何人か-PL.ABS 後ろへ 移動する-INF-も 始める-PST
 「何人かは後退しも始めた」 [ASS, 2009 No.4, p.3]

さらに、二つの動詞の結びつきが強い場合、埋め込まれている動詞を等位接続することはできないが、bajbiç-ize の場合、(20)のように、wa 「および」 で二つ以上の不定詞動詞を結ぶことができる。

- (20) Heł bajbiç-ana
 それ. NH.ERG 始める-PST
 tušbabi ğur-ize wa pasat ha-r-ize.
 敵. PL.ABS 撃退する-INF および 殲滅する. PL-INF
 「それは敵を撃退および殲滅し始めた」 [DJu-A, p.237]

したがって、bajbiç-ize と埋め込まれている不定詞動詞の結びつきはかなり弱いと言える。

3.5 一致

アバール語には語幹に一致標識が付く動詞と付かない動詞がある。語幹に一致標識がある動詞では、その一致標識は、絶対格名詞（自動詞の S, 他動詞の O など）の性・数（男性単数 v, 女性単数 j, 非人間単数 b, 複数 r）を示す。上に挙げた(1)で使われている自動詞 AM-eł-ize「笑う」の過去形 w-eł-ana は絶対格である S の Emen「父」と一致していて、(2)で使われている他動詞 AM-ecc-ize「ほめる」の過去形 w-ecc-ana は絶対格である O の was「息子」と一致している。語幹に一致標識がない場合も、一致が起こる場合がある。たとえば、(21)では、主文動詞に自動詞 unt-ize の形容詞的分詞 unt-ara-j が使われている。

- (21) qizan-išš unt-ara-j?
 妻. ABS-QES 病気になる-APRT.PST-F
 「妻が病気しているのか」[SM1-N, p.32]

形容詞的分詞は最後に一致標識が付く。形容詞的分詞の基本的な用法は名詞を修飾することであり、最後に付いている一致標識は修飾されている名詞の性・数を表すが、(21)のように、主文動詞に定形動詞の代わりに形容詞的分詞が現れることがある。(21)では、名詞に疑問標識の-išš が付いているが、この場合、主文動詞には形容詞的分詞が使われる。主文動詞に形容詞的分詞が使われている場合、最後の一致標識は絶対格名詞の性・数を示す。また、動詞の変化形が主動詞の非定形と補助動詞の組み合わせで複合的に作られることがある。たとえば、主動詞の不定詞形と存在動詞 AM-uk'-ine「いる、ある」の現在形の組み合わせで動詞の未来形ができる。(22)がその例であるが、補助動詞として使われている w-ugo は主動詞の O と一致している。

- (22) Nižeca he-w č'wa-ze w-ugo
 私達. ERG その人-M.ABS 殺す-INF M-いる-PRT
 「私達はその男の人を殺す」[XM-M, p.51]

ある動詞に不定詞形動詞が埋め込まれた場合、下位の不定詞形動詞の絶対格名詞が上位の動詞と一致することがある。bajbiç-ize の語幹には一致標識はないが、上で述べたように、主文動詞として形容詞的分詞が使われたり、複合的に作られている変化形などでは、不定詞動詞の絶対格名詞と一致が起こっているかを知ることができる。(23)では、他動詞が bajbiç-ize に埋め込まれていて、他動詞の O と bajbiç-ize が一致を起こしている例である。

- (23) He-z-gi-cin klasik-azul asar-al [...]
 その人-PL.ERG-も-さえ 古典-PL.GEN 作品-PL.ABS
 r-içça-ze-gi bajbiç-un r-ugo
 PL-出版する-INF-も 始める-PCONV PL-ある. PRS
 「その人達さえも古典の作品を出版し始めている」[XAK, 2010, No.10]

私が調べたテキストにおいて、他動詞では、4 例で、(23)のように、一致が起こっている。一方、51 例で一致が起こっていない。自動詞の場合、実際に S が絶対格で現れている場合だけを問題にする。S が無生物の場合、一致しているのは 3 例で、一致していないのは 2 例である。S が生物である場合では、一致しているのは 2 例で、一致していないのは 5 例である。これでわかることは、bajbiç-ize は埋め込まれた他動詞の O や自動詞の S と一致することがあるが、他動詞の O とは一致しないことが圧倒的に多いということである。

次に、bajbiç-ize の S が能格で現れている場合について考える。まず、(24)の例を見てみよう。

- (24) şadam-al r-eñanq-u-le-b iş
 人-PL.ABS PL-笑う-APRT.PRS-NH こと. ABS
 ha-b-iç'ogo he-sda ç'-eze
 する-NH-SCONV.NEG.PST その人-M.LOC1 止まっている-INF

k'-ole-w w-uk'-un heč'o.
 できる-APRT.PRS-M M-いる-PCONV いない. PST
 「人々が笑うことをしないでいることはその男の人はできなかった」
 [SM3-A, p.67]

k'w-eze「～できる」は、経験者を第一位格で表す動詞であり、不定詞動詞と結びつく。(24)の不定詞動詞は自動詞である。自動詞のSはk'w-ezeの経験者によりコントロールされているので、(24)では自動詞のSは現れていないし、そもそもSは現れることはない。しかし、(24)では、k'w-ezeの変化形であるk'-ol-e-w w-uk'-un heč'oは、埋め込まれた自動詞のSと一致している。k'w-ezeに埋め込まれている不定詞動詞が自動詞である場合にどのくらいの頻度でSと一致するのかは調査を行っていないのでまだわからないが、bajbiç-izeが自動詞を埋め込んでいて、そのSが能格で現れている場合、bajbiç-izeがそのSと一致をすることがあるのかどうかは興味深い。しかしながら、bajbiç-izeの変化形で一致をしていることがわかる形で現れている例は、10例しかなく、その10例は、一致をしていない。(25)はその例であるが、一致は起こっていない。

- (25) Kida duca bajbiç-ara-b
 いつ あなた. ERG 始める-APRT.PST-NH
 «Suğrał» kolxoz-alda halt'-ize?
 Sogratl コルホーズ-LOC1 働く-INF
 「あなたはいつ Sogratl コルホーズで働き始めたの」
 [SUG, 2008, No.4, p.14]

(25)では、疑問詞を伴う疑問文であるため、bajbiç-izeが形容詞的分詞 bajbiç-ara-bで現れていて、最後の一致標識を見ると、一致が起こっているかがわかるが、Sが男性であるのに対して、一致標識は無生物である。アバール語では

一致が起こらない場合、無生物の一致標識が現れる。

4. その他の用法

上で述べてきた以外で、*bajbič-ize* は(26)のような使われ方をする。

- (26) [...], — *jan bajbič-ana Gurewič-as.*
 QUOT 始める-PST *Gurevich-ERG*
 「Gurevich は... と話を始めた」 [RG 1-G, p.305]

bajbič-ize は、(26)のように、「～と話を始める」という意味でもよく使われる。話す人は能格で現れ、意味的に言うと、話という名詞が話すという動詞が省略されているような感じである。

5. おわりに

本稿では、開始を表すアバール語の動詞 *bajbič-ize* が印刷物からのテキストでどのように使われているのかについて、統語的な観点から議論した。

最初に、*bajbič-ize* が「～が始まる」という意味の自動詞としても、「～が～を始める」という意味の他動詞としても使われることを述べた。アバール語には変化あるいは移動を表す自動詞としても、また、それに行為者の意味を加えた他動詞としても使われる動詞が多く有り、そうした動詞では、他動詞としての用法で表す内容を、その動詞の使役形でも表すことができ、そのような使役形は普通に使用されているが、*bajbič-ize* の使役形の使用はともまれであり、私が調べたテキストには一例しか出てこない。

次に、「～が～をし始める」という意味での *bajbič-ize* の用法について議論した。特に、重要なのは、自動詞が *bajbič-ize* に埋め込まれた場合である。その場合、自動詞の S が絶対格で現れることと能格で現れることがある。S が無

生物である場合、その S は絶対格で現れる。S が生物である場合、絶対格で現れることと能格で現れることがあるが、意図性がないあるいは意図性がほぼ問題にならない動詞では S は絶対格で現れる。

最後に、「～が～を話し始める」という意味でも bajbiç-ize が使われることを述べた。

例文で使ったアバール語の文献とのその略号

[ASS] AS-SALAM (新聞). Makhachkala.

[DJu-A] Dadaew, Jusup, Añul goñ — dir rek'el buñi. Maxachkala: Jupiter, 1998.

[GG-G] Ğalbac'ow, Ğazimuñamad, Ganč'al. Maxachkala: Dagestanskoe knizhnoe izdatel'stvo, 1994.

[GM-S] Ğaliew, Muslim, Sardiļ ƭwahi. Maxachkala, Jupiter, 1993.

[MIL] Millat (新聞). Makhachkala.

[MM-G] Muñamadow, Musa, Goro-c'er balelde cebe. Maxachkala: Dagestanskoe knizhnoe izdatel'stvo, 1991.

[MP-K] Murtazaliewa, Pat'imat, Kulakasul jas. Maxachkala: Dagestanskoe knizhnoe izdatel'stvo, 1995.

[RG 1-G] Rasulow, Ğarip, Ğadamalgi raġadalgi. Maxachkala: Dagestanskoe knizhnoe izdatel'stvo, 1996.

[RG 2-A] Rasulow, Ğarip, Anišša ƭul c'wajalda xadur. Maxachkala: Daguchpedgiz, 1996.

[SM 1-N] Surxaew, Musalaw, Nux bit'agi. Maxachkala: Daguchpedgiz, 1990.

[SM 2-T] Surxaew, Musalaw, Tusnaqazda GULAGalda. Maxachkala: Jupiter, 1994.

[SM 3-A] Surxaew, Musalaw, Awaragasul xalġat. Maxachkala: Jupiter.

[SUG] Suğraļ (新聞). Sogratl.

[ShM-C] Šamxalow, Muḥamad, C'udul was. Maxachkala: Daguchpedgiz, 1982.

[XAK] Haq'iq'at (新聞). Makhachkala.

[XM-M] Hamzaew, Muḥammad, Muḥammad awarag. Moscow, 2005.

参考文献

- Alekseev, M. E. & B. M. Ataev (1997) *Avarskij jazyk*. Moskva: Academia.
- Alixanov, S. Z., et al. (2003) *Russko-avarskij slovar'*. Makhachkala: Institut Jazyka, Literatury i Iskusstva DNTs RAN.
- Bashirova, R. S. (2008) Analiticheskie konstruksii glagola avarskogo literaturnogo jazyka. Kandidatskaja dissertatsija, Institut Jazyka, Literatury i Iskusstva DNTs RAN. Makhachkala.
- Bokarev, A.A. (1949) *Sintaksis avarskogo jazyka*. Moscow-Leningrad: Izdatel'stvo AN SSSR.
- Devletmurzaeva, U. D. (2011) Kontsepty “nachalo” i “konets” v avarskoj jazykovoj kartine mira. Kandidatskaja dissertatsija, Dagestanskij gosudarstvennyj universitet. Makhachkala.
- Gebekova, Z. G. (2009) Glagol'nye slovosochetaniya v avarskom literaturnom jazyke. Kandidatskaja dissertatsija, Dagestanskij gosudarstvennyj pedagogicheskij universitet. Makhachkala.
- Magomedova, D. A. (2010) Tipologija sredstv vyrazheniya funkcional'no-semanticheskoy kategorii aspektual'nosti v avarskom i anglijskom jazykakh. Kandidatskaja dissertatsija, Institut Jazyka, Literatury i Iskusstva DNTs RAN. Makhachkala.
- Madieva, G. I. (1980) *Morfologija avarskogo literaturnogo jazyka*. Maxachkala: Daguchpedgiz.
- Mallaeva, Z. M. (2000) Vido-vremennaja sistema glagola avarskogo literaturnogo jazyka. Doktorskaja dissertatsija, Institut Jazyka, Literatury i Iskusstva DNTs RAN. Makhachkala.
- Mallaeva, Z. M. (2002) *Grammaticheskie kategorii avarskogo jazyka (Modal'nost', Zalogovost')*. Makhachkala: Jupiter.
- Muxtarova, D. M. (2012) Glagol'nye slovosochetaniya v avarskom jazyke v sopostavlenii s russkim. Kandidatskaja dissertatsija, Dagestanskij gosudarstvennyj pedagogicheskij universitet. Makhachkala.
- Saidov, M. (1967) *Avarsko-russkij slovar'*. Moskva: Sovetskaja Ėntsiklopedija.
- 山田久就 (2010) 「アバール語における結合価」, 『アジア・アフリカの言語と言語学』(東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所), 4 : 85-109.